

平成 28 年度 総合問題 (第二部 商経学科) 解答例

問 1 (70 点)

【採点のポイント】

- ・ 伝統的な経済学と、行動経済学の違いが理解できていること
- ・ 文字数の条件が適切に守られていること

【解答例】

伝統的な経済学では、最初の計画通りに行動し続ける、後悔しない人間を前提にしてきた。しかし実際には、カードの使い過ぎで多額のカードローンを抱え込む人や、老後の年金よりも現在の消費を重視して年金保険料を支払わない人など、伝統的な経済学が想定していない、後悔する人が少なくない。従って、公的な規制や制度を設計する上では、現実に存在する後悔する人間を前提としてシステムを設計することが求められる。つまり、後悔するような人間をモデルにして、経済学を構築する必要がある。伝統的な経済学のスタイルを維持しつつ、ある種の非合理性の分析を可能にした行動経済学は、その必要性に応えられたことが発展してきた理由である。(298 字)

問 2 (70 点)

【採点のポイント】

- ・ 資料 1, 2 を踏まえていること
- ・ 一定量の文章量があること
- ・ 自分の主張が明確であり、その理由が述べられていること

【解答例】

解答例①

非合理的な人間を前提として公的な規制や制度が設計されることは必要であると考え。非合理的な行動をする人がいるのが現実であり、そのような人たちに、「必要な知識を学び、将来を考えて行動しなさい」といくら言い聞かせても、それを理解させることは難しいのではないだろうか。資料 2 のデータからも、必ずしも正解を導き出せない人が少なからず存在していることが、それを証明していると考えられる。また、結果的に多額のローンに苦しんだり、年金をもらえなかったりする人が発生したときに、それは自己責任と切り捨て、何の手当てもしなければ、そのような人たちは社会を不安定にさせる要因となり、社会全体に悪い影響を与えるのではないだろうか。それを防ぐためには、強制力を持った規制や制度を設計しておく必要はあると考える。

解答例②

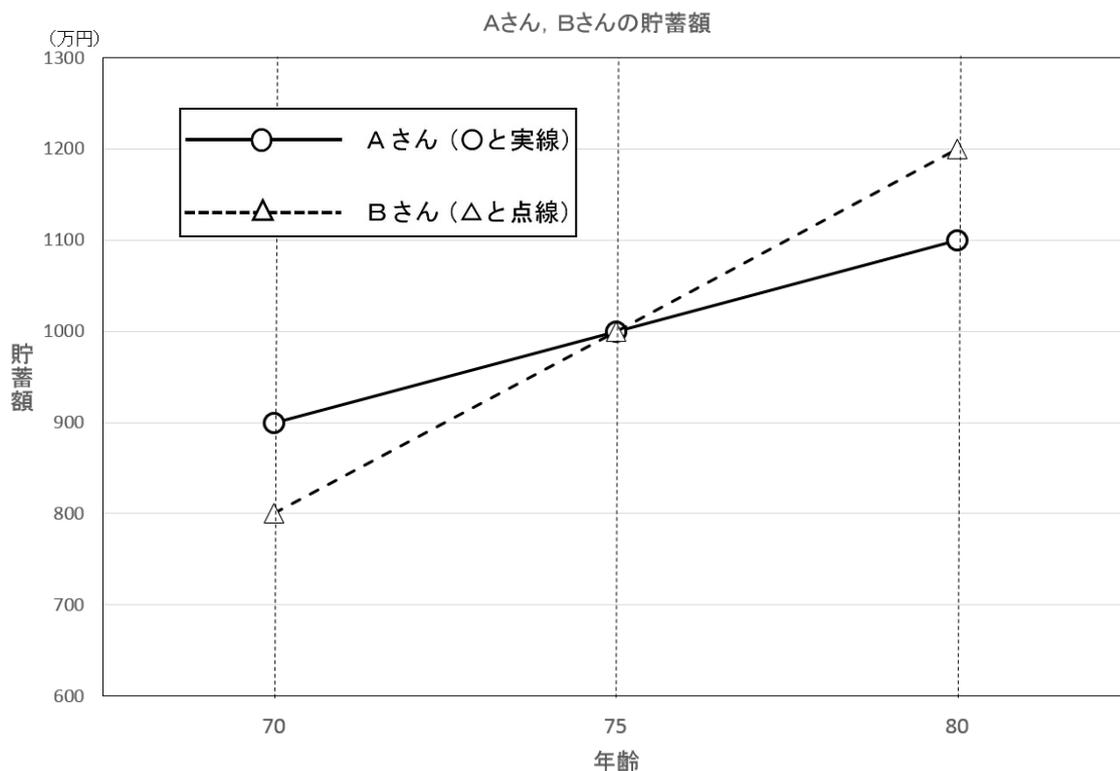
非合理的な人間を前提として公的な規制や制度が設計されることについて、私は必要がないと考える。まず、基本的に自分の行動や考えに対しては、自分自身が責任を持つべきであり、たとえ将来的に苦しい立場におかれるような行動をしたとしても、それは自業自得であり、結果的に自らが痛い目に合うことで自分の間違いに気づくはずである。また、非合理的な人間を前提とした制度などは、合理的に行動できる人にも適用されることになり、これは余計な干渉であるとともに、合理的な人に必要以上の負担を強いる場合もあるのではないだろうか。さらに、正しい知識を身につければ、非合理的な行動は少なくなるはずであり、貯蓄に関する問題に対しても正解率が70%以上あるということは、努力すれば合理的な知識を身につけることを証明していると考えられるからである。

問3 (40点)

【採点のポイント】

- ・ Aさん、Bさんの70歳、75歳、80歳の貯蓄額が正しいか
- ・ 正しくマーカー、線（実線、点線）が書けていること

【解答例】



問4 (20点)

【解答】

才